

日本天文学会早川幸男基金渡航報告書

2006年6月10日採択

申請者氏名	大辻賢一 (会員番号 4815)
連絡先住所	〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町宇宙物理学教室
所属機関	日本天文学会
職あるいは学年	M2
任期 (再任昇格条件)	
渡航目的	研究集会での口頭発表
講演・観測・研究題目	Hinode/SOT High Resolution Observation of Small Scale Magnetic Flux Emerging around a Sunspot
渡航先 (期間)	タイ (2007年7月30日～8月4日)

- 出張の成果

ひので初期成果のプロモーション

非常に高分解能なひのでの画像を見せ、初期の浮上磁場領域の様子を発表した。

国際学会への出席

国際学会における口頭発表は初めての経験であり、課題も多かったものの、次へ繋がる発表が出来た。

- 感想

海外での初めての発表だったということがあり、色々予想外のことが起こった。具体的には出発前のインターネットでの航空券・宿泊所の予約においてクレジットカードで支払ったところ限度額を超えてしまい、いざタイでカードを使おうとしても使えなかった件である。このため会議初日の受付での参加費が支払えず、日本に限度額引き上げの国際電話をかけるなど手間取ってしまった。そのため初日の最初のセッションは残念ながら参加しそびれてしまった。柴田先生がチェアマンをされていたセッションだっただけに、大変惜しいことをしてしまった。自分の至らなさを今でも後悔している。

自分の発表では、拙い英語ながらも言いたいことを伝えることが出来たと信じる。質問もされたが、幸い聞き取ることが出来た。しかしうまく相手の意図する受け答えが出来ず、柴田先生に助け舟を出していただくことになった。これは次回の国際会議ではぜひとも改善したい部分である。

また次回にリベンジしたい点として、質問や他の発表者とのコミュニケーションが取れなかった事が挙げられる。これでは何のために海外まで来て発表を行ったのかと思われても仕方が無い。次には必ず果たしたい。

会議場でほとんどインターネットが使用できなかったのが想定外だった。メールを読むことがなかなか出来ず、結果タイ滞在中に柴田先生との連絡がほとんど出来なかった。

会議の時間の余ったときに、北井先生と論文について議論することが出来た。かれこれ3時間は打ち合わせを行ったように記憶している。そういう意味でも有意義な滞在であった。

以下は雑記に近いものである。

関空からの飛行機の機内食では鰻が出た。土用の丑の日だったからか。最近騒がれている中国産なのだろうかと言いつつながらも食す。

観光はタイ王宮とアユタヤを見てまわった。タクシーでボッタクリに遭いそうになった。アユタヤには頭部を破壊された仏像が多数配置されていたが、そのそばの注意書きに「首のない仏像の後ろから自分の頭だけ出して、あたかも仏像の首から自分の頭が生えているようなポーズで写真を撮らないでください」とのお触れがあった。しかもそれだけ日本語で書かれていた。きっとそういうことをする日本人が多いのだろうと恥ずかしくも思った。

タイ料理で一番気に入ったのは『カーオマンガイ』と呼ばれる、タイ米をチキンスープで炊き上げた味付きのライスにチキンのスライスに乗せたものである。刺激的な味の料理が多いタイ料理の中で、この料理の落ち着いた味付けは良い胃休めになった。

刺激的な料理の代表格としては『トムヤンクン』がある。私はレストランでトムヤンクンを頼んで食べてみたが、何やら硬い枝のような具が口に当たる。私はそういうものだと思って我慢して食べていたが、後で聞くとそれはいわゆるレモングラスの枝であり、香り付けのために入れてあるのであって食べるものではないと知らされ愕然とした。日本の鍋で言う出し昆布を食べてしまったようなものか。

タイ料理のもう一つの特徴として、ココナッツの存在が挙げられる。私と同行した松本君は道端で売っているココナッツの実を試してみたくなり、20バーツほど買ってその汁を飲んでみた。私も少し飲んでみたが、なんだか青臭い水を飲んでいるような感じでありあまり美味しいものではなかった。

タイではカレーにもココナッツミルクが入っている事が多いが、日本に帰るためにスワンナプーム国際空港で時間待ちしている際に食べたレッドカレーにも用いられていた。このレッドカレーは異様なほどまでに辛く、私達は顔を真っ赤にして食していたが器の中身は遅々として減らず、危うく飛行機の搭乗時間を逃してしまうほどだった。しばらくタイ料理は遠慮しようと思う次第である。

スワンナプーム国際空港とバンコクを結ぶ交通機関は現時点でバスかタクシーしか存在せず、多くの海外からの旅行者は500バーツ近くの大金を出してタクシーを利用するようだ。旅の終わりとなり手持ちのバーツが心もとなかった私達は、バンコクの市民が一般に利用するバスに乗って空港まで向かうことにした。

バスは戦勝記念塔と呼ばれる地区のロータリーから出るのが、いざそこに到着してみるとパッと見て50台以上の色とりどりのバスがロータリーを回っている。この中から自分の目当ての空港行きのバスを探すのは大変骨が折れる仕事だった。しかも重い荷物を引っ張りながらである。ようやく探し当てて乗り込むと、車掌さんと思しき人物が料金を徴収しに回ってきた。35バーツ。タクシーとは天と地の差である。乗客も大半が地元の人である。降りる時は日本と同じくベルを鳴らして合図していた。

東南アジアに行くのは今回が初めてで、様々なものを見聞して勉強になった。特に考えさせられたのは道端に佇む物乞いの人の多さだった。(自ら切り落としたのか)腕の無い人、赤子を抱く婦人等、見ていて心が痛んだ。彼らの姿は今でも私の脳裏に焼き付いている。